

NMO OfficeLetter

猛暑日数県庁都市では京都市が最多！

最高気温が35度Cを超える猛暑日の日数が、最近10年間の年間平均日数で京都市が全国1位になっている。気象庁のデータを基に地元京都新聞社が集計した。1924年以降10年ごとの年間平均日数を集計したところ、京都市が24.7日となり47都市で全国トップになった。

＜解説＞県庁所在地以外では、岐阜県多治見市が27.0日で最多。埼玉県熊谷市は22.9日になった。逆に、最も少なかったのは意外と沖縄県那覇市で0.2日。海洋性の気候で猛暑日になりにくい。次いで、札幌市0.6日、青森市1.4日となってい

●全国47都道府県庁所在地の猛暑日ランキング

年平均猛暑日数 (2010年代)	1980～2009年の 30年間平均との比較	順位	割合
京都	23.8	66%	増
甲府	23.3	114%	増
岐阜	19.2	59%	増
前橋	18.8	127%	増
大阪	17.6	68%	増
名古屋	17.5	65%	増
佐賀	17.5	82%	増
さいたま	16.8	229%	増
鳥取	16.7	96%	増
熊本	16.4	45%	増
高松	16.3	114%	増
岡山	15.8	63%	増
奈良	15.4	111%	増
福島	14.4	157%	増
山口	14.1	220%	増
福岡	13.6	189%	増
大津	13.4	347%	増
福井	13.0	183%	増
広島	11.1	147%	増
富山	9.6	88%	増
大分	8.5	158%	増
山形	8.3	118%	増
宇都宮	8.2	156%	増
松江	8.2	122%	増
東京	8.0	196%	増
和歌山	8.0	100%	増
松山	7.8	255%	増
鹿児島	6.8	79%	増
津	6.7	40%	増
長野	6.5	110%	増
神戸	6.1	103%	増
徳島	5.6	93%	増
宮崎	4.8	6%	減
水戸	4.4	175%	増
金沢	4.2	40%	増
長崎	3.8	100%	増
静岡	3.6	16%	増
高松	3.4	62%	増
千葉	3.3	57%	増
新潟	2.7	13%	減
横浜	2.5	150%	増
盛岡	1.5	200%	増
仙台	1.5	200%	増
秋田	1.5	25%	増
青森	0.7	250%	増
山梨	0.2	100%	増
那覇	0.0	100%	増

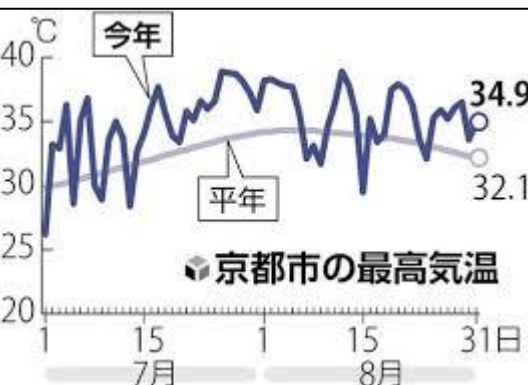
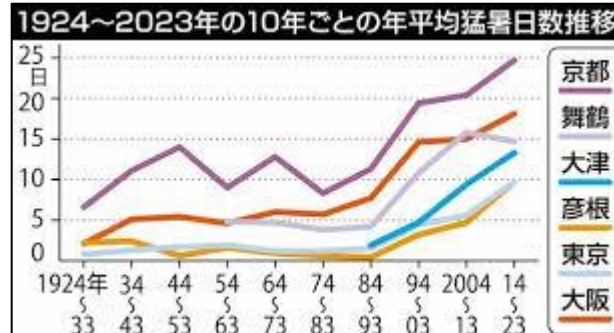
●全国のほかの暑いまち

徳島	28.1	140%	増
多治見	27.6	82%	増
日田	26.5	66%	増
熊谷	23.8	90%	増



る。この100年間を通じて、確実に猛暑日は増え続けている。1924年から70年間は、各地で猛暑日の日数は増減を繰り返していたが、1994年以降は確実に増加の傾向に転じた。100年前の京都市の猛暑日の日数は年間6.6日。しかし、1994年以降、急激に増加に転じ、19.4日になりそれ以降も増加の傾向は止まらない。原因として考えられるのは、京都市が盆地であること。空気が入れ替わりにくく、海岸線からも遠いため日射での気温の上昇が激しい。別の暑さを示す「熱帯夜」という指標では、最低気温が25度Cを下回らない日を指す。近年、京都市ではこの熱帯夜の日数が急激に増加している。ここ10年間の熱帯夜の日数

は京都市で35.9日、全国47都市中12位になっている。熱帯夜が最も多いのは、沖縄県那覇市で117.7日。海岸線に沿った都市で熱帯夜が多い傾向がある。京都市では猛暑日の増加より、熱帯夜の増加が顕著で、寝苦しい夜が増加している。今後もこの傾向は続くと思われる。ゼロカーボンの動きは世界中で高まっているが、地球温暖化を食い止めるには今まで以上の努力が必要だろう。あるいは、この温暖化の傾向を大前提にビジネスモデルの変更を考えて



おかないといけない。年間4回ある四季の移り変わりも、某アパレルメーカーのように、夏の次に猛暑の夏というカテゴリーを加えた。さらに、春と秋の期間が短くなる傾向が強い。6月と10月の衣替えも変わるだろう。ノーネクタイの期間も長くなり、当然のごとくになってきた。衣料、住居、食生活など多くの生活面の急激な変化が求められている。自社のビジネスモデルにも大きな影響を及ぼす地球温暖化現象。これをチャンスと考えるか、ピンチと考えるかで大きな分かれ目になる。後ろ向きに考えればきりが無いが、これを成長のキーワードにするしかない。